
顕彰部

部長 宮崎 斗士

顕彰部・事業報告

(2024年6月～2025年6月)

○第79回現代俳句協会賞

受賞 マブソン青眼『妖精女王マブの洞窟』令和6年6月22日(土)選考委員会を開催。

選考委員5名(恩田侑布子・清水伶・永瀬十悟・林桂・渡辺誠一郎)による長時間に渡る厳正な審査の結果、マブソン青眼の第79回現代俳句協会賞受賞を委員全員一致で決定した。

○第44回現代俳句評論賞

受賞 田辺みのる『楸邨の季語「蟬」—加藤楸邨の「生や死や有や無や蟬が充滿す」の句を中心とした考察』

令和6年7月6日(土)選考委員会を開催。応募総数14編。選考委員5名(井口時男・西村我尼吾・橋本喜夫・松王かをり・武良竜彦)による厳正な審査の結果、田辺みのるの第44回現代俳句評論賞受賞を委員全員一致で決定した。佳作として石川夏山「詩人石原吉郎の俳句観一定型は彼を救った—」、また選考委員奨励作に石橋いろり「俳人金子はるを訪ねて—秩父山峡に生きる兜太の母—」、蜂谷一人「動画的俳句論」の2編が選ばれた。

○第25回現代俳句協会年度作品賞

受賞 村田珠子「霧の海」

令和6年7月20日(土)選考委員会を開催。応募総数171編。選考委員7名(岡田耕治・神田ひろみ・倉田明彦・木暮陶句郎・鈴鹿呂仁・田中朋子・松本勇二)による厳正な審査の結果、第25現代俳句協会年度作品賞受賞作は村田珠子「霧の海」(30句)に決定。また、佳作として望月士郎「そらいろの空箱」、木村和也「さりさりと」の2編が選ばれた。

○第42回兜太現代俳句新人賞

受賞 百瀬一兔「火の聲」

令和7年3月1日(土)、内幸町・日本記者クラブ10階ホールにて公開選考会を開催。選考委員8名(小林恭二・穂村弘・杉浦圭祐・瀬間陽子・董振華・仲寒蟬・成田一子・堀田季何)による2時間以上に渡る選考の結果、百瀬一兔氏の「火の聲」(50句)が第42回兜太現代俳句新人賞を受賞。佳作に島田道峻氏「放鳩」、宇都宮駿介氏「象の耳」の2編が選ばれた。

◇『現代俳句年鑑2024』の発行

年鑑のメインである諸家近詠は1名5句、1560名が参加。総句数7798句（1名多行形式により3句）を掲載。表紙には1603名とあるが、その差43名は、購読のみの申し込みということになる。

参加句は、従来形式に合わせ50音順に配列。

「現代俳句協会顕彰作品集」として、第24回現代俳句大賞、第41回兜太現代俳句新人賞、第44回現代俳句評論賞、第79回現代俳句協会賞、第24回現代俳句協会年度作品賞を掲載。また、「現代俳句協会顕彰者一覧」として、歴代の受賞者を掲載。

他に、会員の最新案内、出版部作成の出版物の案内、物故会員追悼、俳誌のプロムナード、協会役員、顧問、名誉顧問、各委員会委員、各地区事務局一覧等も掲載。

各部活動報告と各地区活動報告は令和4年度からホームページに移行している。

◇『現代俳句年鑑2026』の発行へ向けて

令和6年度から部長が田口武に代わった。山本敏倅前部長は部員として残り、部長を助けている。他の部員は、秋谷菊野、石口りんご、川崎果連、白石正人、西本明未、羽村美和子、町野敦子、本杉康寿、森須蘭、山田ひかる、我妻民雄。

内容は昨年度と同様で、11月の発行に向け作業を続けている。

校正漏れのないことを目標に、初校から五校、念校と毎回複数人で校正を繰り返しているが、それでも毎年度数か所の校正漏れが出てしまうことは残念な点である。

諸家近詠で採用する漢字は、基本的には改正常用漢字表にある漢字、人名用漢字、表外漢字字体表の印刷標準字体とそれらの旧字（作者が使用している場合）を用い、それぞれにない漢字については、漢和辞典等の示すいわゆる康熙字典体を用い、異体字や略字は用いないことにしていて、校正時に書き替えている。

歴史的仮名遣いについては、誤りを訂正している。

文語文法については、辞書には「特に平安時代を基礎として発達・固定した言語の体系、または、それに基づく文体の称」とあるが、現代俳句協会にはさまざまな俳句観の人たちが集まっているので、文法上の正解を辞書に書かれていることひとつには絞れないことから、基本的には原稿のママとしている。

参加者数は、例年全会員の4割弱になっているが、今年度も同程度の参加率である。

◆ 事業報告（2024年7月～2025年6月）

月刊『現代俳句』冊子版（通算705～718号）の発行に引き続き取り組んだ。各号の主な内容は次の通り。

- 【7月号】対談「花鳥諷詠と前衛」星野高士×筑紫磐井 全2回
 - 【8月号】第24回現代俳句大賞 寺井谷子
 - 【9月号】第79回現代俳句協会賞 マブソン青眼
 - 【10月号】第44回現代俳句評論賞 田辺みのる▽渡邊白泉研究余滴(6) 川名大▽連載「横山白虹と松本清張」小野芳美 全5回
 - 【11月号】第25回現代俳句協会年度作品賞 村田珠子
 - 【12月号】「被爆と反核の俳人 松尾あつゆき」上野啓祐▽現代俳句協会賞・兜太新人賞受賞者競詠 マブソン青眼×楠本奇蹄
 - 【1月号】俳句のユネスコ登録の現状と現代俳句協会の立場 後藤章
 - 【2月号】第61回現代俳句全国大会▽現代俳句とは何か「昭和百年」の今、考える 松田ひろむ
 - 【3月号】子どもの俳句一目撃者の詩として-川田由美子
 - 【4月号】現代俳句のハードコア 高橋修宏
 - 【5月号】第42回兜太現代俳句新人賞 百瀬一兎▽私が推す「現代俳句」五人五句 協会役員アンケート結果 全2回
 - 【6月号】第25回現代俳句大賞 中村和弘
10月号と2月号は増刊号とし、評論賞、現代俳句全国大会についてそれぞれ詳報するとともに、読み応えある論説を掲載し、コンテンツに親しみやすさと本格志向の両面を期待する読者のニーズに応えた。
- 並行して24年1月より配信がスタートしたWEB版『現代俳句』（現俳ウェブ）の一般公開を9月号から試行的にスタートした。インターネットを通じ、会員以外も内容を自由に閲覧し、すべての記事を読むことが可能な状態を継続している。公開後、毎号2千～3千台のアクセスを集め、協会の情報発信の拠点として大きな存在感を示すに至っている。
- 【9月号】「アニミズム俳句」、無垢句、そして『縄文大河』への道のり マブソン青眼
 - 【10月号】新連載「時間大丈夫？」毎週更新▽評論賞受賞作「楸邨の季語『蟬』」 解題・石寒太
 - 【11月号】第25回年度作品賞・佳作30句 木村和也・望月士郎
 - 【12月号】第49回現代俳句講座 詳報・一問一答 高野ムツオ・星野高士・筑紫磐井
 - 【1月号】**嘯風広場**「別れた訳、分かれている理由」日野百草
 - 【2月号】**嘯風広場**「花鳥諷詠」に先進性はあるか 西池冬扇
 - 【3月号】▽「戦後八十年、昭和百年」に思うこと—みちのくの帰還俳人— 栗林浩 全3回▽角川俳句賞受賞者「競詠」相互評 岩田奎、岡田由季
 - 【4月号】「昭和百年/戦後八十年 今、現代俳句とは何か」～「現代」俳句から「現代俳句」へ 林桂▽障がい者としての俳句 水越晴子
 - 【5月号】第42回兜太現代俳句新人賞受賞者インタビュー▽私が推す「現代俳句」

五人五句選 25人の全コメント（～6月号）

【6月号】五人五句選句結果・作者別集計＝最高点は赤黄男、窓秋、白泉、兜太、澄子

研修部

部長 なつはづき

事業報告

① 研修通信俳句会

会員限定。年6回、紙媒体で行う互選の句会。会員とは別に講師が2名。第30期は渡辺誠一郎氏、鳥居真里子氏。今期からメールを利用し、通常の郵便と併用して行っている。約半数がメールを利用。利便性を図っている。

② 通信添削教室

会員および非会員対象。通信添削。現在は講師9名体制。受付は郵便およびメール。今年度から協会員と協会員以外で料金を変え、協会員によりメリットのある仕組みにしている。

③ 俳句教室

会員および非会員対象。現代俳句協会の図書室にて行う3つの教室（火曜・松田ひろむ氏／水曜・羽村美和子氏／金曜・宮崎斗士氏）に加え、Zoomを使ったインターネット句会（五島高資氏）の4教室ある。講義中心、句会中心など教室により特色がある。各教室は最長二年と限定し、講師も順次入れ替える。令和8年度に講師を一新する。

④ 初心者講座

会員および非会員対象。現在は2講座。両講座とも通信。年10回。4月開講の講師は後藤章氏。動画配信・添削・ネット句会。期間は一年限定で延長不可。10月開講の講師は五十嵐秀彦氏。一句鑑賞と句会を組み合わせた内容で、初心者はもちろん学び直しの人も受け入れる講座。一年の限定の規定はなく何年も受講可。また初心者講座の需要が多いため、令和7年10月よりもう一講座開講予定。講師は瀬戸優理子氏。10回のミニ講義は基本から歴史まで幅広い。

⑤ 全句講評講座

会員限定。全国または地区協単位で行う。本部より講師を派遣し地区協で運営を行う。講師料や交通費などは研修部負担。令和6年12月に福岡県に高野ムツオ会長、東海地区になつはづきが講師として招かれ、各会40名近い会員が集まった。

⑥ 評論教室

会員および非会員対象。令和6年8月に3回連続講座を行った。当初は協会図書室で行う予定が申込者多数の為、別会場（銀座の中小企業会館）にて行われた。講師は秋尾敏氏、筑紫磐井氏、柳生正名氏。3回で延べ120名の受講があった。

⑦ 現代俳句講座

会員および非会員対象。毎年東京都荒川区の施設、ゆいの森ホールで行われる講演会。荒川区民は無料にて入場できる。令和6年度は10月27日、高野ムツオ会長と星野高士副会長による対談を行った。タイトルは「この一句をどう読みますか？」。二部構成で一部はそれぞれが挙げた影響を受けた句を互いに読み合い、二部では俳句のこれからについて熱く意見を交わした。荒川区民の他、非会員からも多数申し込みがあった。

出版部

部長 上田 桜

出版部 1年間の事業報告 (令和6年7月1日～令和7年6月30日)
出版部発行の句集・現代俳句の躍動シリーズV—I～VI—3まで。
兜太現代俳句新人賞

令和6年度発行の句集

『時の水辺に』著者、山崎加津子、現代俳句の躍動V—5、発行日7月7日
序山崎十生

『母は水色』著者、栗原かつ代、現代俳句の躍動V—7、発行日10月10日、
序文、山本敏倅

『母(オモニ)』著者、朴 美代子(パク・ミデジャ)、現代俳句の躍動V—8、発行日10月23日、巻末に(敬称略)秋尾 敏・伊藤正美・田中 陽・中村和弘。
この句集は令和6年12月8日付の朝日新聞「朝日俳壇」に、うたをよむ、オモニを恋う、過酷な境涯が分かる句の数々には息をのむ……11句の作品と記事が紹介されました。

令和7年6月30日までの句集

『けむりの木』著者、小西 瞬夏、現代俳句の躍動V—6、発行日3月1日、解説は柳生正名

『一本の道』著者、足立 和子、現代俳句の躍動V—9、発行日3月3日、あとがき、中村和弘

『十七会(となかい)』著者、長井 寛、現代俳句の躍動V—10、発行日2月4日。
渾身の600句。

『グッドタイム』著者、楠本 奇蹄、兜太現代俳句新人賞シリーズ4、発行日5月1日、帯文は穂村 弘(歌人)

『法師蟬』著者、小野里 勲、現代俳句の躍動VI—2、発行日5月5日、序文、中里麦外

句集『法師蟬』は群馬県の上毛新聞、文芸欄の書評の中で、頂点を極めた詩的進化とあります。著者、97歳、農生活の哀歓を深く描いたものである。と紹介されました。

『瑞穂のまほろば』著者、本田 巖、現代俳句の躍動VI—3、発行日5月25日
現代俳句協会の図書室では昭和から平成の俳人たちの句集付き勉強会をしています。

句集の欲しい方は協会の図書室で、協会用としてとっておいた句集を陳列していますのでお問合せください。その他の活動としては青年部に協力して文学フリマ東京へ5月と11月に来店し句集の販売を致しました。

出版部の句集は、300部、並製本で68万円くらいで制作できます。もっと低価格で句集出版を希望の方は、予算に応じて対処いたしますので、気軽にご相談ください。

社会事業部

部長 堀田 季何

昨年の事業報告でも述べた通り、社会事業部は、目下、ジュニア俳句を主軸に活動を行っている。小中高大に在学する年齢層を対象に、俳句を普及させる活動である。ただの国語の授業にとどまらず、生命について、地域の自然や文化について、SDGs について、社会や世界についての教育手段としても期待される。かつてのジュニア部と違い、寄付金、助成金、補助金を集める形で資金調達を行い、持続可能な社会事業として育ててゆく計画である。

この1年間は、昨年、公益財団法人公益推進協会のJM基金から受けた助成金を活用し、全国8校で、俳句の特別授業を行った。中学校は、高知市立鏡中学校、済美平成中等教育学校、青山学院中等部、足立区立入谷中学校、足立区立第九中学校、高校は、愛媛県立東温高校、埼玉県立狭山緑陽高校、星野高等学校である。どの学校においても、時間をかけ、また、学年に合わせ、座学、吟行・作句、句会という3種類の課程を実施し、様々な角度で俳句を学べるようにした。結果、どの学校においても、生徒にも教員にも非常に好評であった。生徒たちは、自分の環境を新たな目で見えて、言語化できるきっかけを得ることができ、また、教員たちは、句の評価の仕方、作り方、鑑賞の方法など、教育現場では、従来ブラックボックスになっていた部分を知る機会を得て、今後の授業に活かせることになった。

このような俳句の種蒔が、子供たちの未来、及び、俳句の未来に影響するであろう、という確かな感触が得られた1年であった。このような成功事例を積み重ねるべく、引き続き、助成金や寄付金の獲得を進めてゆく予定である。

国際部

部長 木村 聡雄

国際部事業報告（令和6年7月～令和7年6月）

国際部は、海外との俳句交流のための本協会の窓口となっている。海外俳句の動向を捉え、また日本からの情報発信も重要な課題である。

現代俳句協会から世界への俳句発信のひとつとして、協会では日系人も多いハワイに支部を新設し、そこを拠点にさらに海外へと俳句を広めるべく取り組んでいる。ハワイでの現俳の活動はまだ始まったばかりであり軌道にのるには何年かかかると予想されるものの、今後の発展が期待される。

2025年5月12日には〈国際部研究会〉として、現代俳句協会ハワイ支部長ナカムラ薫氏をお迎えし「ハワイの俳句——日本人移民の俳句と現俳ハワイ支部」のテーマのもと、現俳事務所の図書室において勉強会を開催した。ハワイでは、明治時代に日本からの移民が始まって以降、日本人の一部の移民のあいだで日本語による俳句が詠まれてきて、戦後もこうした日本語俳句は続いている。英語俳句については、現地の子どもたちを中心に取り組みが進められている。今日では広く俳句の種を撒く活動が続けられていると言えるだろう。

一方、俳句の「ユネスコ世界遺産」登録運動も進みつつある。現代俳句協会国際部でも、国際俳句協会のほか俳人協会や日本伝統俳句協会とも協力し、俳句四協会が一丸となってこの課題に取り組んでいる。ユネスコ登録のためには、まず日本国内の「無形文化財登録」が必要である。昨年、2024年の春には、文化庁により俳句を含む短詩型の基礎調査が始まった。それを受けて2025年には昨年の調査を深めるべく、第2回目の調査に入っている。

この運動のさらなる推進のため、本年5月には〈日本EU俳句大使〉であるヘルマン・ファンロンパイEU初代大統領が来日された。ファンロンパイ氏は、登録無形文化財の管轄である文化庁を訪問、作曲家でもある都倉俊一文化庁長官にこの運動の早期の決着を要請し、文化庁も受け入れてくれたのである。この時に国際部長も同行した。

俳句の国際化が進んでいるとはいえ、その道のりはまだこれからと言うべきであろう。